

---

# 石の剣と神殺し

長良金

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

石の剣と神殺し

### 【コード】

N5038L

### 【作者名】

長良金

### 【あらすじ】

死の間際にオレは誓った。この世の全ての生命を殺し尽くしてやる。

死後に最凶の魔剣を手に入れたオレが目的を果たすために次々と敵を屠っていく。これはそんなお話。

## プロローグ1

(さて、俺はなにをしていたのだったかな)

ぼんやりとそんなことを思う。

記憶が曖昧だ。意識が朦朧とする。さっきから頬が冷たい。俺は今、うつ伏せに倒れてでもいるのか？

(何故、俺は倒れているのだろうか)

寒いな。身体から熱が逃げていくような感じがする。

(じつとしても始まらない。現状を把握するべきか)

そう思い、周囲を見渡そうとして気付いた。

世界が赤で満ちている。

いや、俺の視界が赤く染まっているのだろうか。周囲がよく見えない。

耳を澄ませてみる。人の声らしき音が聞こえる。随分と大声でなにか喚いているようだが、ノイズでも奔っているかの如く、うまく聞き取れない。

突然、衝撃を感じた。殴られてもしたのだろうか。痛みを感じないのは麻痺しているからだろう。

俺は死ぬのだろうか。ふとそんなことを思った。

(おかしいな。人であるならば死を恐怖するべきではないか)

俺は今恐怖をしていない。それはこの状況が死ぬようなものではないからか。そうでないなら俺はもう人ではないのだろうか。

また衝撃を感じた。痛くはないが、思考の邪魔だな。鬱陶しいところの上ない。

(さつきからなんなんだ。落ち着いて考え事も出来やしない……)

三度、衝撃を感じる。少しくらいそつとしておいてくれてもいいだろうに。

一言文句を言ってやろうと視線だけで周囲を見回すと、すぐ目の前に嘲笑を浮かべた男がいた。

不思議なことに表情は判るのに顔が判らない。さつきの衝撃で俺の頭がおかしくなったのかもしれない。

(何故だろう。コイツを殺さなければいけないような気がする……。)

曖昧な意識のまま俺はそう思った。動かないと思っていた身体が無意識の内に動いていた。俺の右手が男の左目へと奔る。

『クソツ！殺してやる！殺してやるぞ！』

やはりノイズ混じりだったが目の前の男がそんなことを言っているのが理解できた。台詞から察するに目を抉りでもしたか。感覚がないから確信はないが。

四度目の衝撃。続けて五度目、六度目。男の罵声と共に俺の身体が壊れていく。

また俺の身体は動かなくなった。もう目の前の男を殺せない。仕方がない、後で殺そう。

一時的に男への興味を失くした俺は、自らの肉体ごと男を無視して思考に没頭する。

何かを忘れていている気がする。俺は確か……。そう、俺は確か目の

前のこの男を恨んでいたはず。復讐のため全てを捨ててこの男を殺そうとしていたはず。結局は返り討ちにあつてこのざまなわけだが。今は何故か恨みも憎しみも感じない。ただこの男を殺さなくてはならないという義務感のようなものを感じる。

（ああ、でも。俺はこの男の顔が判らないじゃないか）

どうしようか……。

ああ、全ての男を殺せばいいじゃないか。いや、念のため女も皆殺しに……。面倒だな。もういつそのこと全ての生命を例外なく殺し尽くしてしまおうか。

今ここには俺と男の二人だけ。そして男は殺せない。なら、自分を殺そうか。

そう思った俺は躊躇なく自らの舌を噛みきった。

## プロローグ2

気がつくとそのは待合室らしきところで、俺はソファアに座っていた。

俺は茫然としている。何故かこの状況に疑問を感じない。

「中里さ〜ん。中里慧さ〜ん。」

受付の人の呼ばれるとそれに反応して立ち上がる。

俺の身体は俺の意思に関係なく勝手に動いて受付らしきところへ向かっていく。

え？中里って俺のこと？俺ってそんな名前だったっけ？

受付には人は居なかった。でもどこからか声だけが聞こえてくる。

「お待たせしました。それでは向かって右側、3番目の部屋へお入りください。」

そう言われ、俺の身体は受付の右側にある『第6多目的室』と書かれた扉を開け、中へと入っていく。

中はまるで診察室のようだった。ここにも人は居ない。ただ声だけが聞こえてくる。

「はじめまして。私はあなたの担当の者です」

薄ぼんやりした意識の中で俺はおもった。名乗らないんだな。

「ええ。正直に申しまして、ニンゲンごときに名乗りたくはありませんねえ」

人間如き？まるであんたが人間以上みたいな言い方じゃないか？

「事実、ニンゲン以上の存在ですので。その証拠に、ホラ。発声出来ないあなたと会話が成立してるでしょう？それにあなたには私の存在を知覚できないはずだ。それはあなたの格が私より低いからです」

なるほど確かに。言われるまで全く気がつかなかった。

「まあ、ここでは力のない者は思考レベルがいくらか低下しますからね。あなたはニンゲンにしては立派な方ですよ。」

それはそれは。まったくもって光栄なことだね。

「本当ですよ？私もいつもだったら会話などしませんからね。いつもはさくつと初期化してハイ、さよならって感じですから」

初期化だって？

「ええ、そうです。あなたは気付いてないかもしれませんが、あなたは死にました。普通ならもつと低位の者が魂を初期化して再び輪廻の輪に組み込むのですが、あなたはちよつと特別です」

へえ。死後の世界ってのはそんな風になってたんだな。あれ、でも俺身体あるけど？

「それは人形です。ニンゲンは魂だけでは思考することすら出来ませんから。それにしても珍しい。あなたは驚かないのですねえ」

まあな。自分が死んだときのことはぼんやりとだが覚えている。

そのおかげだろう。で？俺の何が特別なんだ？

「ええ。私はこの仕事、結構長いんですけどね？こんなことは初めてですよ。あなた、死ぬときに何かとても強い感情を抱いていたでしょう？」

……ああ。多分。

「普通ならそうして死んだ者は現世に留まるものなんですよ。所謂幽霊というヤツですね。しかし、あなたは何故かこちらに来てしまった」

俺としては、その幽霊つてのになりたかったな。そうすれば復讐出来たかもしれんしな。

「こちらもその方が楽でしたよ。こっちに来たあなたは他の魂と同じように初期化されるはずでした。ところがあなたの魂はなぜか初期化できない。低位の者が初期化できない魂はたまにあります、私でも不可能なのはあなたが初です」

試してもいないのにわかるのか？

「既に試しています。あなたが気付いてないだけで」

おいっ！ちょっと待て！

「うるさいですねえ……。いいじゃないですか、何もなかったんだから」

そっという問題じゃないだろう！



「私が思うに、原因はあなたが狂っているせいだと思つんですよ  
ね」

スルーかよ！つて、狂ってるだと？俺は正気だぜ？

「それは精神のことでしょうか？私が言ってるのは魂のことです。あ  
なたの魂は狂ってる」

どこがどう違つてんだよ？

「基本は同じだと思いますよ？私は初めて見るので詳しくはわかり  
ませんが、おそらくは死後正気にもどるか、狂ったままか、くらい  
の違いでしょう」

だから！俺は狂ってない！

「それは勘違いです。今のあなたの人格、つまり精神は生前のもの  
の模倣です。その人形はあなたの死体をもとに作ったのでその影響  
で一時的に正気に戻ったのでしょ」

……嘘だろ？

「残念ながら本当のことですよ。じきに私の要請した増援がくるは  
ずです。そうしたらあなたの魂を特殊な器材を用いて初期化します。  
今、あなたと会話するのはそれまでの私の暇つぶしに過ぎません」

……おまえ、いったい何なんだよ。

「今更ですね。まあ、いいです。教えましょう。冥土の土産という

やつですね。私はそう、あなたの知識の中では、天使、というのが最も近いのではないでしょうか。ああ、どうやら増援が到着したようです。お喋りはこのくらいにしておきましょうか」

自称天使のそんな言葉を最後に俺は意識を失った。

### プロローグ3

「それではこれより崩剣を用いた魂の初期化を行う」

声が聞こえる。

「危険では？」

今俺は魂だけの状態らしい。

「問題ない。これは贋作、レプリカだ。本物など使う筈がないだろう」

自称天使なアイツの話では魂だけでは思考することは出来なかったはずだが。

「そんなことは当たり前です！あんな最凶最悪の魔剣を使うなど冗談でも口にしないでください！」

ふむ。天使と話をしていたあのときの俺。今の俺とはまるで別人のように感情的だったな。

「ふん！なにをそんなに恐れる必要がある？このレプリカなんて本物の数億分の一の力しかないというのに」

アイツが嘘をついていないのなら今の俺は狂ってるんだったな。

「本物の数億分の一だろうと本質は変わらない！」

なるほど、道理で。この、殺さなければならない、という義務感。これが俺の狂気というわけか。

「わかったわかった……。そんなに心配ならさっさと終わらせてしまおう。例の魂をここに」

ん？どうやら話が終わったようだな。

目の前に黄金に輝く細剣がある。神々しいのだが、どこかくすんでいるように感じる不思議な剣だ。

「初期化を開始する」

「……わかりました」

剣を突き刺される。ああ、なんだこれ？俺が薄くなっていく？

「現在、崩剣による浸食は順調です。異常有りません」

俺が俺でなくなる。

でもまあ、そんなことはどうでもいいか。

それよりこいつらだ。どうやって殺そうかな？

「な？何も問題なんてないだろ？」

ふと誰かに呼ばれた気がした。え？なに？契約？そう、手伝ってくれるんだ。対価？構わないさ。なんでも好きなだけ持って行ってくれ。

「……ええ。……？浸食が終わった？おかしい。こんな短時間で終

わかるはずが……。初期化されていないのか？まさか失敗したのか！  
？」

そう。名前を呼べばいいんだね？わかったよ。  
魂だけの俺はそのカタチを人型へと変えた。

「エリス  
石剣」

俺は崩剣を媒介に石剣を呼びだした。崩剣が耐えられずに消滅する。

石剣。それは見た目、普通の細剣だった。いや、たった一つだけ、名前どつりに剣身が石で出来ているのが特徴と言えるか。

目の前の石剣を手取る。石剣と薄くなつた俺が混ざっていく。  
俺が変質する。

「はあっ！」

驚愕から立ち直つた天使が抜刀して斬りかかってくる。

オレは石剣で刀ごと両断した。天使は刹那の間もおかずに魂ごと石剣に喰われ、吸収される。死体は残らない。

「う、うわあああっ！」

もう一人の天使が逃げようとする。逃げられるわけがないのにね。

石剣から殺すための知識が経験ごと流れ込んでくる。オレは得た知識から必要な技術を選択・実行した。

一瞬で天使の背後へ移動する。所謂、縮地というやつだ。

そのまま天使を無造作に斬り払い、魂を喰らう。  
やっぱり天使も殺せば死ぬんだな。

なら神も殺せば死ぬのだろうか？今度試してみようか。まあ、死

ならないならその時は死ぬまで殺すだけの話だ。

「エリス」

《なんだ？我が君よ》

「オレは力を手に入れた」

《そうだな》

「これから全ての生物を片っ端から殺して行こうと思っただが」

《好きにすればいい。私の願いはヘスラを殺し、その魂を喰らうこと。それさえ叶うならあとは私をどう使おうとあなたの自由だ》

「そうか。オレはそのヘスラとやらを含めた全てを殺す。だからお前はオレにもてる全てを差し出せ」

《もちろんだとも。永い時の中で初めて得られた仕手だ。私のもてる全てを差し出し、あなたに尽くそうではないか。ああ、それと。片っ端から殺していくというのは辞めた方がいい。まずは弱者を喰らって強くなってくれ、我が君よ》

## V S 天使兵 1

オレはゲームをする時は説明書を読んでから更にチュートリアルをやつて、それから本編を始める。そんなタイプだ。

理由は単純。いきなり本編から始めて詰まったことがあるからだ。中盤まで進んでたのに泣く泣く最初からやり直した訳だが、データを消してから何となく説明書を読んでみると解決方が載っていた。ふざけんなよ！オレの心は折れた。

それ以来オレは説明書はもちろんチュートリアルもトばさなくなつた。

「そんなわけで今オレはチュートリアルを受けているわけだ」

目の前の羽の生えたおっさんを細切れにしながらそんなことを思う。それにしてもなんでオレはこんなどうでもいいことを覚えているんだらう？

《身体の調子はどうだ？》

チュートリアル担当はエリスだ。最初は剣が話かけてくるとかウゼエとか思ってたけど訂正するわ。

「どうもなにも恐ろしいくらい絶好調だな。いつからオレはニンゲン辞めてたんだ？」

絶好調なんてモンじゃない。相手が剣を振りかぶる間に29回斬りつけられる。さつき試した。

《ニンゲンとしての死、崩剣による浸食、私石剣との融合、魂の吸収。

これだけやってヒトでいられるわけないだろう》

改めて言われるとすごい経験だな。ん？石剣との融合だと？契約  
じゃなかったのか？  
エリス

《契約時のあなたは消えかかっていた。それを補うために私は自らの魂を二つに分けた。そして片方をあなたと融合させた。契約はその後に行われた》

あれ？オレ今口に出してたか？

《私と、私の半魂と融合したあなたはよく似ている。口に出さずとも考えていることはわかる》

へえ。便利だな。じゃあオレの心を読んでオレの疑問に答えてくれよ。ちょうど天使も片ずいたところだ。質問タイムと行こう。

《ああ。まずは石剣<sup>私</sup>についての話だ。石剣。それは斬ったモノの魂を喰らう魔剣だ。魂を喰らえば喰らわれた存在は完全に消滅する。そして喰らった分だけ強くなる。強力だが使い手の魂も喰らってしまうせいで今までだれにも使えなかった。あなたは石剣<sup>私</sup>と融合したので問題ないがな》

すごい剣だったんだな。天使を斬った時に身体まで消滅してたのはなんでだ？

《魂以外にも仕手の力量によっては喰らうことができる。今のあなたでも死体を喰らうくらいは容易い》

オレがもっと強くなれば他にも喰らえるようになるのか？



《然り。時間や空間すら喰らうことも不可能ではない》

すごいな。じゃあもつと鍛えないと。

《必要ない》

?強くならなくてもいいってのか?

《違う。鍛錬では強くなれない。今のあなたは魂だけの存在だ。身体は想像どつりに動かせる。疲労もないし、成長もしない。さらに言えば食事、排泄、睡眠、呼吸のどれも必要としない》

オイオイ……。まるつきり人外だな。もう十分に強いじゃないか。

《まだ弱い。これでは神を殺せない》

殺せない、だと?それはマズイな……。どうすれば強くなれる?

《簡単なことだ。喰らえば良い。石剣はもちろん、石剣の半魂と融合したあなたも喰らう程に強くなる》

なるほど。だいたいわかった。要は適当に殺しまくれればいいんだろ?

《適当では困る。私があなたの力と敵のおおよその力を教えるから、勝てる敵から喰らうっていつてくれ》

そんなのこと解るのかよ?

《ああ。教えられるのは戦力値と神格値の二つだ。戦力値は戦闘の強さのことだ。神格値は神に掛かる補正のことだ。さっきの天使は戦力値100神格値2といったところか》

上がると強くなるのか？

《戦力値はそうだ。しかし神格値は違う。0から遠いほど強く補正が掛かる。例えば神格値10なら全能力が10%上昇し更にダメージが10分の1になる。-10ならダメージが100%上昇するが全能力が10倍になる。と、おおよそんな感じだ。ちなみに神格値1〜10までが天使級、10以上を神級、-1〜-10を悪魔級、-10以下を魔王級と呼ぶ》

……ありえないくらい強くなるんだな。

《だからこそ神と呼ばれるのだ》

オレはどのくらいなんだ？

《戦力値100305神格値6だ》

……強いな。

《より具体的には

石剣	戦力値100000	神格値0
+天使3人	戦力値300	神格値6
+我が君	戦力値5	神格値0
”	戦力値100305	神格値6

となる。》

オレ弱くないか？ほとんど石剣の力じゃないか。

《一般人は戦力値3だ。あなたは十分強い。それと石剣は本来もつとずっと強い。あなたが力を引き出せていないから10万しかないのだ》

そうかい。だいたいわかったよ。チュートリアルはもう終わりだ。とりあえず天使を狩りにいくぞ。

《頑張ってくれよ。今のままでは話にならないからな。なぜならヘスラの戦力値は兆を超えるのだから》

## V S 天使兵 2

石剣を振るう。天使を構えた剣ごと両断する。

スッ……。

手ごたえを感じない。石剣が斬れすぎるためだろう。とても石で出来てるとは思えない。

身体もオレのイメージを寸分の狂いもなくなぞっていく。何故か、死角すらも把握できる。

最強の攻撃力を誇る剣。石剣により習得した武技。そしてそれらを完璧に使いこなせる身体。

これだけ揃っててそうそう負けるはずもなく、オレは出会った天使たちを問答無用で切り捨て続けた。

まさに見敵必殺。

見つけたヤツから屠っていく。縮地で接近して一閃。ほとんどは防御ごと切り裂かれ、一撃で石剣に喰らわれる。運よく回避したヤツも刹那の間もおかずに放たれる。二撃目により両断される。

「雑魚ばかりだな」

そう思っていた。力に酔っていたのかも知れない。だから、オレは慢心していた。

《油断は死を招く。気を引き締めるべきだ》

エリスのそんな言葉にもオレは耳を貸さなかった。

そして……。

「その結果がこれってわけか……」

オレは今、前後左右を天使に囲まれている。いや、微妙に今までの天使どもとは違っていた。装備が明らかに強化されているのだ。今までの天使どもは剣か槍を持っているくらいだった。だがコイツらは違う。全員が全身をフルプレートの鎧で覆い盾まで持っている。さらにはボウガンらしきものを持っているヤツまでいる。そしてなにより統制がとれているのだ。

これはもう、ただの天使ではなく天使兵とも呼ぶべきだろう。

「拙いな……。どうしようか」

《今の我が君ならさして問題はないだろう。ダメージは食らうだろうし、時間も掛かるだろうがな》

エリスの言葉に励まされる。そう、オレなら大丈夫だ。そう自らを鼓舞した。

「放てっ！」

敵の指揮官らしき天使兵が指示を飛ばす。同時に矢が飛んでくる。ヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュン……。

おいおい、こんなところで飛び道具なんて使ったら同志討ちすんだろうに……。

自分に向かつてくる矢を斬り払いながら、そんなことを考える。

まあ、オレとしては好都合な訳だが。

だがまあそんなに都合よく行く訳もなく。矢は天使兵の盾や鎧にあたってカンカンと弾かれている。チツ！同志討ちしてくれれば楽だったんだがな。

全方位から無数に飛んでくる矢の弾幕。さすがのオレも防御で手いっぱいだ。さて、どうやってこの状況を切り抜けようか……。

「倒せなくても構わん！！我々はレブル様が来られるまで時間を稼いでいればいいのだ！！敵は立ち往生している！！そのまま撃ち続ける！！」

レブル？誰だ？エリス、知ってるか？

《個人名は判らんが、おそらく神の一柱だろう。今の我が君では勝率はそれほど高くはあるまい。撤退を推奨する》

撤退つたつて、この状況からどうやってだ？

《簡単な事だ。さっきも言ったように、矢を避けずに突撃すればいい。なに、死にはしないだろう》

それしかないのか？痛いのは嫌なんだがな。まあいい、今回はオレの慢心が招いた結果だ。

オレは矢を無視してさっきの声が出た方へ突撃する。前方の矢は斬り払いながら進んだために食らうことはなかったが、背中は今頃ハリネズミだろう。

「密集しろッ！！突破を許すなッ！！」

前方の一団が盾を構え、抜剣する。構わずに突撃した。そのまま先頭の天使兵に斬りかかる。盾で防御されたが、その盾ごと切り裂いた。

勢いのままに集団を切り崩していく。いくら斬られたが傷は浅い。痛みを無視して剣を振るい続ける。

「貴様ア！！」

目の前には指揮官らしき男。コイツを倒せば指揮を乱せる。オレは剣を一閃する。

「フンッ!!この程度!!」

ギンッ!

驚いた。盾で受け流しやがった。こんな事初めてだ。コイツ、他の雑魚とは違う!

「ハアアアアアアアアッア!!」

天使兵が渾身の突きを放ってくる。回避は……間に合わない!? オレは左の素手で突き出される剣の軌道を捻じ曲げつつ、必死に身体を捻る。同時に右手は二撃目を放っている。

脇腹を斬られる感触と、右手に敵を斬ったという確かな手ごたえを感じる。どうやら殺せたようだ。

しかし浅いが脇を斬られた。左手の方に至ってはしばらくは使えないだろう。

ゆっくり休みたいが、そうも言っていない。未だに周囲は天使兵だらけだ。とにかく包囲を突破し、身を隠さなければ……。

オレはとにかく前へと進んだ。指揮官を倒したおかげか統率が乱れている。今なら突破するのはそう難しい事じゃない。

そしてオレが包囲を突破したとき。目の前にそいつがいた。

「オイオイオイオイ……。どういうことだ、こりゃあ?お前らは足止めすら満足にできねえんかあ?ああん?」

黒髪黒目で着ている服も上から下まで全て真っ黒の、まるで死神のように陰気な男だった。目元は長い前髪で隠れていて顔は良く判別できず、ローブのような服はダボダボで体系も判らない。

「レ、レブル様！これは……」

天使兵からそんな声が聞こえてきた。

「言い訳はいいから。無能は死ね」

レブルと呼ばれた男はそう言ってこちらに向かって手をかざす。拙い。あれはいけない。

「さあ闇よ、我が前のゴミクスどもを焼き払いたまえ。黒耀火<sup>エンデラ</sup>」

男の翳された手から闇が出てきた。闇がオレと天使兵達を飲み込もうとする。

「喰らえ、石剣……！」

オレは石剣に全力で闇を喰わせる。かろうじて拮抗した。おそらく天使兵を優先したのだろう。

その天使兵達は闇に吞まれていた。闇はまるで炎の性質でも持っているかのように天使兵達を燃やし尽くしていく。

悲鳴は聞こえない。それすらも燃やされたのだと、何故か理解できた。

「さて、と。お前が石剣の主か？ああ、答えなくていい。これから殺すんだから。どうせ、この施設は焼却処分なんだ。一緒に焼き払ってやるよ。しっかし、上の連中はそんなに石剣が怖いのかねえ……」

目の前のコイツには敵わない。見ただけで解る圧倒的な実力差。



逃げるしかない。だが、どうやって？

「さあ、燃やし尽くしてあげよう」

そう言っって黒い死神はそれはそれは楽しそうに嗤うのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5038/>

---

石の剣と神殺し

2010年10月12日01時20分発行